学道用心集提唱　第五回

仏教伝道センターにて

井上希道

坐に先だって

初めての方はどうぞ前にいらして下さい。出来るだけ空間を取った方が良いですよ。坐禅の目的は本当の自分の正体を体得することです。これを見性と言います。

日常誰もが経験している避け難い惑乱葛藤。それによる苦しさは、時として自殺という終局を選ぶことさえ有る程です。つまり生命身体まで捨ててしまわなければ逃れることが出来ない苦しみを生み出すものは何かです。それが心です。そんな心とは畢竟何者なのか？　何処に潜んでいるのか？　何時出て来るのか？　どうして出てくるのか？　何処へ消えていくのか？

こう言う切実な疑問を抱く者にとっては、心こそ決定的な問題であり、解決しなければならない課題です。心の正体がはっきりしさえすれば、自分自身に迷わなくなるのです。これが見性です。性を見る。坐禅の性は坐禅です。坐禅の目的は坐禅です。坐禅の結果は坐禅です。見性は、坐禅が坐禅であることを、坐禅によって確かにそうだと知ることです。つまり、自分自身に成って、本当の自分を知ることが見性です。「撥草参玄はただ見性を図る」とあります。坐禅修行は本当の性を知ることです。

坐禅は「只」坐禅。このぐらい疑いえようの無い確かな世界は無いでしょう。呼吸は「只」呼吸、歩行は「只」歩行です。目は目をしているだけで、何処にも好き嫌い美醜は無い。執着も前後も何も、迷いも悟りもない。此処が着眼すべき急所です。目は初めから迷ったり苦しんだり嘘があったりしないから、更に修行して救われる必要がないのです。目は初めから誰もが目をしているだけです。ですから目は修行する必要もなく、修行して救われる必要もないのです。

ところが目によって見た物に囚われ、瞬間に波紋を生じて心に悶着が起こる。よく有る例として、過去に最悪の関係があった御仁に出会ったとする。瞬間に怒りが出てくる。それをそのまま衝動化させてしまうと事件になる。それはいけないと判断をして、心の内で処理をする。その為には意志力がいる、知性もいる、言い訳もいる、慰めもいる、励ましもいる。でも腹が立つ、悔しい、今に見ていろと反駁の機を待ったりする。と言う風な諸々の感情なども随伴して苦悶し葛藤する。事実は単に目に於いて御仁を見ただけです。目には何も問題はないのに、内に於いて混乱を起こす。

苦しみや葛藤となる元は、目（見聞覚知）と心との関係に重大な要素がある。環境がもたらす刺激に対して、受け止める内なる関係が重大問題である。耳に於いても言葉に於いても、畢竟見聞覚知の全てに於いて、我々が苦悶を引き起こす関係、即ち心の構造が有るのです。これを解決すれば一切の悶着は昨夜の夢の如く消滅して、大安楽の境界となるのです。これが坐禅の目的です。

その危険で怪しげな関係、構造はどのようになっているかです。

目の侭の時、何らの問題はない。見るままです。聞く時、聞くの侭ですと「只」の音声です。執着も迷いも苦しみもない。この関係は、眼耳鼻舌身意が色声香味触法と作用しただけです。これは本来の自然な機能であって、善でも悪でもない。一切に拘わらず、それがそれを「只」しているだけです。そしてそれらは今、

瞬間の出来事で、何の痕跡もなく消滅して一切が無い。

つまり本来は何らの関係はないのですが、心が起こり、念が立ち、自己が有ると、それらを認めて情報化してしまうのです。情報化したら最後、限りなく波紋を呼び葛藤することになるのです。このようにわざわざ関係を作る所に、迷いの根元が発生するメカニズムです。これを取るのが修行なのです。別に取るべき物があるのではない、わざわざ関係を持とうとする心の癖を陶冶するのです。

では何故、心が起こり、念が立ち、自己が生ずるのかです。是れが無ければ初めから何事もないのです。無駄な関係を持つものがないからです。だとすればこれが重大なポイントです。我々の全身、見聞覚知から眼耳鼻舌身意、色声香味触法全てが、元より偽物も過ちも迷いも無い。と言うことは、救う必要も修行することも無用だということです。だが一瞬の刺激に即関係を持ってしまう癖がある限り、永遠に惑乱し続け、天然の有りの侭でさらさらとはいかないのです。どうしても癖を取る為の修行が必要となるのです。

その癖の正体は、「隔て」です。心身が離ればなれになってしまったからです。勿論この身体を離れての心は無いのですから、本来は離れる物ではないのです。が、言葉を覚え、空想力、想像力を逞しくする訓練をしてきた為に、事実より観念現象を真実だと思い込み、それに執着して、目前の真実が見えなくなったのです。要するに心が外に向かって走り出てしまい、ここで隔てが出来たのです。即ち、事実を観念で捕らえて「分かったつもりになった」ことです。これが誤解の始まりです。顛倒夢想と釈尊は言われました。要するに心が勝手に一人歩きして取り留めが付かなくなったからです。これを元の身心一如に返すのが坐禅です。

そうすると、手立ての最初は、走り出ようとする癖を治めることにあります。心が直ぐに拡散し雑念と化してしまう癖を取れば、本来の身心一如に復帰するからです。そのためには飛び出す隙を与えぬ事です。具体的にどうするのかです。特別なことをするのではなく、一つ事に成り切るだけです。

結果を必要とする仕事は、結果がちゃんと出て始めて、その過程の努力が報われるのですから、情報もマニュアルも経験も、全てを駆使しなければなりません。想像を逞しくして心静かなことはありません。とにかく一生懸命です。仕事に打ち込んだ結果、現れた物は仕事に於いての結果に過ぎません。仕事の努力は具体的な成果が現れても、内に於いて心の癖が取れると言うことはないのです。ただし、一つ事に成り切るポイントを獲得しておれば別ですよ。

一つ事に成り切り徹するには、「身に為す事なく、心を全く用いない」ことです。と言うことは、静かな部屋で、何もせず、「只」端坐することです。一切の目的を持たず、静かに坐して、「只」空しく淡々と在ればよいのです。何も思わず、願わず、求めずが肝要なのです。

されど、初めは頻りに拡散し猛く妄想して止まるところを知りません。これが隔たりによる不安定状況であり怖さです。この辛い状態を一刻も早く脱出する事が賢明です。そのために意を強くして、走り出る癖と戦うのです。即ち、隔たるのは瞬間の出来事です。瞬間を守り切れば走り出る隙間は無くなるのです。一つ事を守り切り、徹し切ることです。何でも良いのですが、一つ事に心を置いて、それを見失わぬよう懸命に努力するのです。此処では一呼吸に成り切る。吐く今に成り切り、吸う今に成り切るのです。

この単純なことを、朝から晩まで、単純に「只」するのです。我を忘れてひたすら「只」するのです。一呼吸がきちっと出来れば、次の一呼吸も出来るのです。何処まで行っても一呼吸しかないのです。これが淡々と出来れば、心は自然に純粋になり、呼吸と自己と一体になり、身と心が親しくなり同化して身心一如に戻るのです。自然を取り戻すには、自然その物に成ることです。自然には不純物も無く、自己も無いのです。

即ち、迷いも囚われも癖も無いのです。呼吸も自然です。偽物の呼吸は全く無いのです。見聞覚知の全てが本来自然の作用で、迷いも苦しみもないのです。隔てが無くなれば、この事が全て明瞭なのです。一呼吸に徹しさえすればいいのです。今、「只」吸い、「只」吐く。この事に徹底専念してください。では、後は努力のみです。

良いですね。特別な事をするのではないんですよ。猫でも犬でもネズミの子供でもやっておる自然の呼吸をひたすら「只」するのです。単純な呼吸を単純に「只」するだけです。幾ら聞いても力になるものではありませんから、早速一呼吸だけに徹してください

提唱

第六　参禅に知るべき事

「右。参禅学道は一生の大事なり、忽せにすべからず。豈に卒爾ならんや。古人、臂を断ち指を斬る、神丹の勝躅なり。昔し仏、家を捨て国を捨つ、行道の遺蹤なり今人云く、行じ易きの行を行ずべしと、此の言尤も非なり、太だ仏道に合わず。若し事を尊らにして以て行に擬せば、偃臥猶ほ懶し。一事に懶ければ万事に懶し。易を好むの人は、自ずから道器に非ざることを知る。況や今世流布の法は、此れ乃ち釈迦大師、無量劫来、難行苦行して、然して後乃ち此の法を得たり。本源既に爾り。流派豈に易かるべけんや。道を好むの士は易行に志すこと莫れ、若し易行を求むれば、定めて実地に達せず必ず宝所に到らざる者か。古人、大力量を具するすら、尚ほ言ふ行じ難しと。識るべし仏道の深大なることを。若し仏道本より行じ易き者ならば、古来大力量の士、難行難解と言ふべからず。今人を以て古人に比するに、九牛の一毛にも及ばず。而るに此の小根薄識を以て縦ひ力を励まして、難行能行に擬するも、猶ほ古人の易行易解にも及ぶべからず。今人の好む所の易行易解の法とは、其れ是れ何ぞや。已に世法に非ず、又仏法に非ず。未だ天魔波旬の行にも及ばず。未だ外道二乗の行にも及ばず、凡夫迷妄の甚だしきと言ふべし。縦ひ出離に擬すと雖も、還って是れ無窮の輪廻なり。其の骨を折り髓を砕くを観るに亦難からずや、心操を調ふの事尤も難し。長斎梵行も亦難からずや、身行を調ふの事尤も難し。若し粉骨貴ぶべくんば、之を忍ぶ者昔より多しと雖も、得法の者惟れ少なし。斎行の者貴ぶべくんば、古へより多しと雖も、悟道の者惟れ少なし。是れ乃ち心を調ふること甚だ難きが故なり。聡明を先と為ず、学解を先と為ず、心意識を先と為ず、念想観を先と為ず、向来都て之を用いずして、身心を調へて以て仏道に入るなり。釋迦老師の云く、観音流を入して所知を亡ず、即の意なり、動静の二相、了然として生ぜず、即の調なりと。若し聡明博解を以て、仏道に入るべくんば、神秀上座其の人なり。若し庸体卑賤を以て、仏道を嫌うべくんば、曹溪の高祖豈に敢えてせんや。仏道を伝へ得るの法は、聡明博解の外に在ること、是に於て明かなり。探って尋ぬべく、顧みて参ずべし。又年老耄及を嫌はず。又幼稚壮齢を嫌はず。趙州は六旬余にして始て参ず、然りと雖も祖席の英雄たり。鄭娘は十二歳にして久学す、能く又叢林の抜萃なり。仏法の威は、加と不加とに見はれ、参と不参とに分る。或いは教家の久習、或いは世典の旧才も、皆な禅門を訪ふべし。其の例是れ多し。南岳の慧思は多才の人なり、尚ほ達磨に参ず、永嘉玄覚は秀逸の士なり、已に大鑑に参ず。法を明め、道を得ること、参師の力たるべし。但だ宗師に参問するの時、師の説を聞て、己見に同うすること勿れ。若し己見に同うせば、師の法を得ざるなり。参師問法の時、身心を浄らかにし、耳目を静かにし

て、唯だ師の法を聴受し、更に余念を交へざれ。身心一如にして、水を器に瀉ぐが如し。若し能く是の如くならば、方に師の法を得るなり。今、愚魯の輩、或いは文籍を記え、或いは先聞を蘊へ、以て師の説に同うす。此の時唯だ己見古語のみありて、師の言未だ契はず。或一類は、己見を先と為して、経巻を披き、一両語を記持して、以て仏法と為し。後に明師宗匠に参じて、法を聞くの時、若し己見に同ぜば是と為し、若し旧意に合はずんば非と為す。邪を捨る方を知らず、豈に正に帰するの道に登まんや。縦ひ塵沙劫も尚ほ迷者たらん。尤も哀むべし。参学識るべし、仏道は、思量、分別、卜度、観想、知覚、慧解の外に在ることを。若し此等の際に在らば、生来常に此等の中に在りて、常に此等を翫そぶ、何が故ぞ今に仏道を覚せざるや。学道は、思量分別等の事を用ゆべからず。常に思量等を帯ぶる吾が身を以て検点せば、是に於て明鑑なる者なり。其の所入の門は、得法の宗匠のみありて之を悉らかにす。文字法師の及ぶ所に非ざるのみ。」

この様に色んな例えを引いて、参禅を始める用心を説いてあります。要するに総論から言えば、絶対に自己を立てて修行してはならんと言うことです。何故なら、技を修得したり、学を広げて利口になることではない。従って別段の要領など一切無いからです。

仏道は大宇宙の真理を体得して真理の人に成る事です。真実の道を得ることにより根底から安心するのです。要するに、道のために道を行ずるだけです。

形や結果だけを重視すればする程、智恵や技術を重んじてしまい、因果の道理を無視して大変なことになっていくのです。真実の道を体得するには正しい修行しかないのです。

心の癖を取るために、釈尊を始めとして祖師方が命懸けで難行苦行されました。その末に体達した最尊の道だから、修行を決して軽く見てはならないぞと戒めています。それは簡単には隔てを取りきることが出来ないからです。それ程人間のしがらみである煩悩は厄介だと言うことです。

何故難行苦行をするかと言うと、求道心一杯でも、方向が定まらない内は心念紛飛のために徹底的に振り回されます。着眼がはっきりするまではどうしようもなく彷徨う、この第一の関門があります。正師にあって正法をしっかり聞いているにも拘わらずです。次に着眼が得られても、正念を相続することが大難です。根気が続かないことと、障道の因縁が多くて、忽ち掻き乱されてしまうからです。生きる為に働かねばならないので、殆どの時間が仕事で消失します。その結果、疲労困憊することも多くて、修行どころではなくなると言う現実があるのです。こうした問題点をクリヤーして初めて道を得ることが出来るのです。従って余程の信念と努力がなければ体達しません。だから難行苦行だと言うのです。することは「只」呼吸に専念没頭し切るだけですが、決着が付くまでに色々な邪魔が入り災うからです。これを障道の因縁と言うのです。

釈尊は前後十三年、その為に国を捨て、名誉も財産も妻子も捨ててかかっておるし、道元禅師も叡山を出てから十三年かかってるでしょう。こう言う風に方向が定まらないとどうしても迷いに迷いを重ねてしまうのです。道を知りたいと思うから書籍を漁ってしまい、文字に囚われ書物に囚われて真正の道どころか、迷いを深めて行くことになるのです。これらを超えて道を得るので、難行苦行と言うのです。そう言う無駄事をさせたくないが為に、ここに道元禅師の慈悲が光るのです。俺が今から言う事を良く守って、俺が苦しんだ様な無駄事はするなと言うことです。

「参禅学道は一生の大事なり、」

まさしくそうですね。お金を貯めた。何を満足させてくれるのか。せいぜい物を買い集め、人に頭を下げさせる事が出来るかも知れない。じゃ生死の苦悶や恐怖感を解決出来たか。根元的苦しみを取ってはくれないし大満足の境界にはならない。名誉も地位もそうです。それ故に本当に根底から安心し、一切の悩みから解放してくれるこの法こそが一生の宝なのです。

「忽せにすべからず。豈に卒爾ならんや。古人、臂を断ち指を斬る、」
二祖神光慧可大師の菩提心に染まれ。師の達磨大師九年面壁の根気を標準とせよ。雪中に立つ者は誰ぞ！

「神丹の勝躅なり。」
神丹とは中国です。最も優れた祖師の様子であるからよく見習えと。

「昔し仏、家を捨て国を捨つ、」
これ菩提心の真髄です。是れによって仏法が現前したのです。大聖釋迦牟尼仏の所以です。

「行道の遺蹤なり」
釈尊を始め慧可大師にせよ、各祖師方の菩提心を良く見よ。修行者の鏡ではないか。どこに我見がある。どこに怠慢がある。修行者とは斯くあってこそだ。参じて知れと。

「今人云く、行じ易きの行を行ずべしと、」
道元禅師の時代にはこう言う事が主流だったのですね。今も昔も真箇の菩提道心の者は少ないと言うことです。自分に怠慢な者が、どうして仏道を達成することが出来ようか、と言いたいのです。

「此の言尤も非なり、太だ仏道に乖わず。若し事を専らにして以て行に擬せば、偃臥猶ほ懶し。一事に懶ければ万事に懶し。」
偃臥とは横になって寝る事です。蒲団に入って寝る事さえも、茶碗を出し入れすることさえも大儀になってしまう。人間は志を抱いたら一にも二にも志を目指し、岩でもぶち抜いて行くと言う気迫を持ってやってこそ道を得ることが出来る。だから易きを選ぶなどとはとんでもないことだから、充分に注意し正しく心得よ。一事に懶ければ万事に懶しとなる。
一大事因縁を体得することさえ易きを選ぶようでは、法の人どころか人としても恥さらしな事であろうぞと。

「易を好むの人は、自ずから道器に非ざることを知る。況や今世流布の法は、此れ乃ち釋迦大師無量劫来、難行苦行して、然して後乃ち此の法を得たり。本源既に爾り。」
良く読み、良く味わい尽くせば、更に何をか言わんや。汗顔頭を潤す。

「流派豈に易かるべけんや。」

仏法はその流れを汲んで今日まで伝えて来た。どの流れにしても全部難行苦行の末の話しである。

「道を好むの士は易行に志すこと莫れ、若し易行を求むれば、定めて実地に達せず必ず宝所に到らざる者か。古人、大力量を具するすら、尚ほ言ふ行じ難しと。識るべし仏道の深大なることを。」

一読了読。粉骨砕身も酬ゆるに足らず。他に言うべき加える言葉は無い。正に仏道の士はこの通りです。生死涅槃を超越する仏道が、如何に尊く有りがたいか。それを得る為ならば、如何なる努力をも惜しむべき理由はない筈です。

「若し仏道本より行じ易き者ならば、古来大力量の士、難行難解と言ふべからず。今人を以て古人に比するに、九牛の一毛にも及ばず。而るに此の小根薄識を以て縦ひ力を励まして、難行能行に擬するも、猶ほ古人の易行易解にも及ぶべからず。今人の好む所の易行易解の法とは、其れ是れ何ぞや。已に世法に非ず、」

道元禅師一流の激励棒喝です。彼も人也、我も人也、為さずんば有る可からず、との噴気を促し、今人の道人は全く取るに足らぬ戯言じゃと奪って、猛奮発を期待しているのです。口の先で、或いはポーズだけの修行がどうしてまかり通るぞや。世法とは世間一般の道です。商売道であれスポーツ道であれ大工であれ、ちゃんとした礼儀と向上心、信頼と技、それに忍耐努力は当然の事であり、道です。それらは皆世間の大切な法ですが、それさえも凌駕しておらぬではないか。大根一本の値は誰が買っても同じだし、代金は誰もがちゃんと支払うものだ。買うべき金子は身を挺して働いて稼ぐものだ。このように世間には易行易解の法など何処にもない。一体何を考えているのだ。そんな横着な生き様をしていたら、世間の誰にも相手にされないであろうと。

「又仏法に非ず。」

墨染めの衣を着て、口に経文を唱え、もっともらしげな寺院生活をしていても、心中貪瞋痴の奴隷ではないか。況や仏法であろう筈がない。

「未だ天魔波旬の行にも及ばず。」

天魔波旬とは悪魔の事です。仏道で言う悪魔とは、仏の邪魔をし修行の邪魔をする輩のことです。それらの行にも及ばず、とあるのは、彼等は彼等なりに信念があって、その為に色々な技なり努力なりをする。勿論危険も侵したりする。釋迦も何度か命を狙われた。釋迦の余りの実力と名声へのやっかみから為されたことです。しかし彼は彼なりの信念を持って釈尊に挑んで行き、遂には服して道の人となった。そんな悪魔にも及ばんではないか。

「未だ外道一乗の行にも及ばず、」

外道は心の外に法を求める輩です。外から得られる法など仏法では無いから外道と言うのです。知的努力、形の努力で得られるものは、又失うものであって、知識や技術の類がこれです。隔てを取れば内外が無くなり一法に円成するのです。迷うのも内の問題であり、解決つけるのも内の事柄であり、決着が付いた時が道の現成です。覚者です。神も仏も内なる法です。即心是仏です。外に法が有る訳じゃないのに、自分の心を

抜きにして外側に求めるから外道と言うのです。書物や語句に囚われ、伝統儀式や形に法有りとして求める輩です。無いものを求めていくから悟れる訳がないし救われる筈がない。誤った修行ですから外道です。これらは心と法と二つに分けているから二乗と言うのです。しかしながらそれは哀れではあるが、彼等なりに真剣に努力をしている姿は、泣くに泣かれぬものがある。彼等の真剣さにも遠く及ばぬお粗末な事よと。

「凡夫迷妄の甚だしきと言ふべし。」

是れを哀れまずして、更に何をか哀れまんや。そんなことをしては駄目だぞと、道元禪師の嘆きです。この慈悲徹悟、誰か寒毛卓立せざる。脚下照顧を促し、即念への着眼を迫ったのです。

「縱ひ出離に擬すと雖も、還って是れ無窮の輪廻なり。」

本当に解脱をしたいと一所懸命頑張っては見ても、「還って是れ無窮の輪廻なり」です。外に向かって求める限り、益々迷い込んでしまい苦しみを増すばかりで、決して救われる事はないと。では如何にしたらよいかです。心外無別法、即心是仏です。平常心是道です。道は知にも属せず、不知にも属せず、とあるでしょう。初めから手が付かないのです。だから何とかしようと自己を運ばないことです。「只」打坐することです。「只」呼吸をすればいいのです。呼吸に迷い有りや、自己有りや、生死涅槃有りやと参究するのです。徹すれば自己無き世界であったと決着するのです。「只」一心を体得すれば足れりです。今即心、即解脱です。如是の法です。

「其の骨を折り髓を砕くを観るに亦難からずや、」

難行苦行は、やろうと思えば誰でも出来る。何時でも出来る。とは道理であり理屈です。真箇に骨を砕き髓を砕く者、果たして居るや否やです。しかしそれとて出来ぬ筋合いのものではない。決すれば出来ることです。

「心操を調ふの事尤も難し。」

どころが得体の知れない心は、姿が無いし神出鬼没で捕まえようが無い。だから飛び回る心を引っ張り出して、エイヤっとハンマーで叩き潰す訳にもいかない。自分の心を自分で整える位難しい事はないぞと。誰もがその事によって日常苦しんでいるのです。それを何とかしようとして、考え方や思考の使い方を模索し、それによって出来るだけ安穏にしようとしているのが世間の対処法です。火を避けて水に溺れるの愚です。

しかしながら調える努力をしなければ道は得られないし、調えようとすれば自己を立てて計らうことになり、道と二人連れになる。さても困ったことです。だからこの難題を超えることは、ただに正しい方法を以てしなければ得られぬから最も難しいのです。だから身に為すことなく、心を用いること無く、一切を放下するのです。即ち真箇の打坐がこれです。身心脱落は只管打坐して初めて得てんと、道元禪師の師如浄古仏の真骨頂です。又、真箇の呼吸と見れば何の難しい事があらんです。真箇とは真実です。身心一如です。既に是れ道です。外に求める法無しです。今今です。

「長斎梵行も亦難からずや、」

長斎梵行とは長期に渡って身を慎む事です。お坊さんらしく、身を美しくスマートに、しかも清浄に保つことです。所謂外見上、非の打ち所がない様に行為する事が長斎梵行です。此等は難しいことではない。やろうと思えば誰でも出来る。出来たとしても夫れだけのことでしかない。だが身を慎むことは己を慎む基本ですから、修行者は決して是れを怠ってはならないのです。

「身行を調ふの事尤も難し。」

けれども第一義はそれらとも違う。禅定解脱とは全く関係がないのです。丹霞焼木仏や六祖非風非幡の消息夢にだも得ずです。尊いことではあるが無上道には遠して遠しですから、愛すべきにして学ぶ可からずです。心の根本を調え正体を徹見する事は最も難しいのです。それ程過去の業は捨て難いし、真実の今に目覚めることは容易ではないのです。眼耳鼻舌身意が有りながら、是れに囚われないことですから、有って無い世界の体得です。この身を空じ切り、無くすことです。一切が気に掛からない事。是れが「身行を調える事」です。「只」の世界です。生易しい訳がないでしょう。

「若し粉骨貫ぶべくんば、之を忍ぶ者昔より多しと雖も、得法の者惟れ少なし。」

信義を尽くすに切腹をした武士は多い。斯くして命を捨て身を捨てた者は数知れず居るが、殺活自在底を得た者は居ない。粉骨砕身も報るに足らずとあるでしょう。粉骨とは何者ぞと参究するのです。粉骨は自己の象徴と知るや知らずや。自己なければ粉骨無し。本より砕身の用無しと打って出なければならんのです。これが殺活自在底の人です。誰かその人に非ずやと究尽するのです。粉骨砕身の後の話しです。

「斎行の者貫ぶべくんば、古くより多しと雖も、悟道の者惟れ少なし。」

斎行は前述した如く清浄に生きることです。小乗が是れです。殺生もしない、肉も食わない、型通りを守って道と為すことです。美醜斎行に囚われている限り、自己の一念を如何ともする事が出来ず、感情の苦界からは到底免れない。斎行は結構な様だが何の為の修行か、根本が貧しいではないかと。小乗の持戒は大乗の破戒とあるのもこの事です。

「是れ乃ち心を調ふることと甚だ難きが故なり。」

何故迷い苦しむのか、この根本の解決が付いていないからだ。つまり全身を全挙して徹していないからだ。それ程徹し切ることは容易なことではないぞと。他のことに心を奪われている暇が何処にあるかとの裏返しです。

「聡明を先と為す、学解を先と為す、心意識を先と為す、念想観を先と為す、向来都て之を用いずして、身心を調へて以て仏道に入るなり。」

これは全て計らい事だから止めなさいと言う事です。今まで知性を使い意志を使って、色んな事を想像し分別してきたが、要するに利口になる為の勉強などは一切止めなさいと。向来は今までしてきた事を言うのです。これを放擲したところから、真実の道に入るのだ。兎に角身心を調えるとは、心に何もしないことであり、自己を立てないことです。自己を立てさえしなければ即仏道であり、その物自体の真実世界だから、他に求める必要はないのです。時時円成です。事事仏性です。無身心と決着するのです。

「釋迦老師の云々、観音の流れを入して所知を亡ず、即の意なり、」

釋迦老師と親しく呼び出しました。中国に於いて老師と言う言葉は今でも日常的に使われています。先生という意味で、「らうし」と発音しますが、勿論お坊さんに対しての尊称のようです。大恩教主釈迦牟尼仏と奉った言い振りとは違って、大先輩としてとても身近に、されど尊意を込めて呼んだのは、自己仏を喚起させようとの慈悲からです。いよいよここから道元禅師の真骨頂です。

観音は観世音菩薩又は観自在菩薩の略です。慈悲救済の菩薩です。観は観る事で観察すること自在の意です。音は音です。大自然の様子です。山川草木悉皆成仏であり自己無き消息を音で代表したのです。観る事自在、聞く事自在。全て自在にすることを観達自在と言い、縮めて観音です。流れを入してとは、流れその物に成り同化して隔ての無いことです。川の流れを眺めている自己が有る間は、流れと自己の二人連れです。流れと言う事が分かるのも自己が有るからです。だからそれが見えると言う事が有り、流れていると評する自己が有るからです。つまりそれ自体から隔たっているということです。ところが流れそのものになり、見ている自己が無ければ、流れを流れと知るものは無いのです。

ここが大事な処です。流れその物になることを、「所知を亡ず」と言うのです。柳は説く観音微妙の相です。有りの侭、自然の侭を法というのです。つまり迷いから覚め、囚われから解放されて自由を得た世界、即ち脱落を言っているのです。本当の自分は、今これ自身です。全体全露です。初めからそうです。更に自分だとすべき自分など何にも無いのです。つまり、今この様子以外に自己とすべき者はないと決着した時、真実の自己に目覚めた時です。

これは釈尊が言っておられる事だから間違いない。解脱無き仏道などは無いのだと、仏道を志す者の第一義を説いたのです。

「動静の二相、了然として生ぜず、即の調なりと。」

流れ自体になると流れが無くなる様に、自己自身を追求して行くと、追究する自分と本来一つものだということに行き着く。知る自己も知られる自己も本来一つだったと気が付くのです。これは元来一つものを、隔てがある為に二つに見ていたからです。分かる分からないと言う囚われから解放されると、動くとか動かないと言う束縛からも解放されるのです。

動きそのものになって余念が無ければ、動きを動きと知る自己は無い。これが只管です。「只」動く時、動いていると言う自覚症状は無いのです。縁ばかりです。これが成り切った様子です。そのものの外に何も無いから唯一です。今です。一つなら迷い得ようが無いでしょう。常に今であり唯一ですから、何事も起こらないのです。動静の二相、了然として生ぜず、即の調なり、とはこのことです。

だから今の流れのまま、即ち縁のままに我を忘れて「只」するのです。所知を亡じて「只」することを只管活動と言うのです。一つに徹する事です。吸う時には吸うだけになり、吐く時には吐くだけです。吸ったものを吐くのだと思った時は隔たった時で、もう既に動静の二相が始まり、分かる分からない、自他損得の世界に落ちているのです。だから吸うとか吐くとかの観念を入れたら駄目ですよ。一心不乱に「只」吸うだけ。「只」吐くだけです。その物自体になれと言う事です。

即は「すなはち」です。「砂は地」です。直ちにそれがその物です。「今」です。「いま」と言う時は無

いでしょう。「い」の時は未だ「ま」が来ない。「ま」の時は既に「い」は過ぎて無いでしょう。

慈性さんが義光老師の「独坐大雄峰」という色紙を真剣に見て、「ど」「く」「ざ」「だ」「い」「ゆ」「う」「ほ」「う」と、ゆっくり発声したかと思ったら、「老師確かに「ど」の時は「ど」しかなくて何も無いですね。「く」の時は「く」しかない、このままで良いのですね」と感心している。

このぎりぎりのところが即です。即はその物です。唯一だから身心一如です。これが調です。ぎりぎり一杯の、前後が無い今に気付いての功夫が出来るようになったと言うことです。ここを錬ればいいのです。

目を開いたらこのものがちゃんと有る。これが即です。目にいきなりころっと「只」是の如く有るだけです。見ておるとか物とかの理屈は何一つ無い。だから目自体になってみると囚われも分別も何にも無い事がはっきりする。それ自体、そのままが仏道であり仏性です。目に任せて自分が無い、これが「動静の二相、了然として生ぜず、即の調なり」です。こう言う風に本源に向かって切り込んで行くのです。

「若し聡明博解を以て、仏道に入るべくんば、神秀上座其の人なり。若し庸体卑賤を以て、仏道を嫌うべくんば、曹渓の高祖豈に敢えてせんや。仏道を伝へ得るの法は、聡明博解の外に在ること、是に於て明かなり。」

道は分かる分からぬではない。難易も無い。既に今、是れが道です。全体全是、露堂々です。だから聡明博解に用が無いのです。神秀上座は聡明博解の人ですが、道を得られなかった。一方の大鑑慧能禅師は庸体卑賤の人と言われた人ですが、「本来無一物、何れの処にか塵埃を惹かん」と究極を得て六祖となった人です。仏道は自己の身心及び他己の身心をして脱落せしむる底に在るのみです。その消息を伝えるには体得でしかなく、伝法は自らを証するしかない。それには菩提心と正師です。菩提心は世俗の念無き純なる努力です。法のみです。他の一切関係無しです。

有名な話なので蛇足します。達磨大師から六代目の人が曹渓の高祖大鑑慧能禅師です。この慧能禅師は薪を売って母を養って居られた。天然にして純粋で、素直で、真面目で、何事も真剣にする人でした。薪作りをするに当たり、その時その場に同化して、ひたすら単調にさらさらやっていたのです。誰にも何も教わっていないし聞いてもいない。生まれながらにして「只」を体得し実践していたのです。「只」鎌を振り上げる。「只」振り下ろす。「只」鋸を引くだけ。だから自己も何も無い。作用のまま。活動のまま。瞬間瞬間「只」、さらさら、さらさらやって毎日を一日の如く過ごしていたのです。勿論それが何であるかも解らず知らず、何の自覚も無いままに、只そうやっての日暮らしでした。

そう言う心は純粋であり単純ですから、明快で何の淀みも無く、勿論邪な心も損得も無い。自分がそうなんだと言う自覚症状も無い。真面目一筋であり真心の人です。だから周囲の人は、本当にこれは素晴らしい器だと認めていただろうし、期待もしていた筈です。

或る時、ごひいきの処で商いを済ませ、いざ帰ろうとした時に托鉢の雲水が門に立ってお経を読み始めたのです。「只」聞いていた時、「応無所住而生其心」（まさに住する所無くして而も其の心を生ず）と言う句に触れた。その瞬間、隔てが真箇に落ちて、眼前から一切が消えたのです。いや、気になる物が全く無くなったのです。心と言うものは何処にも無いのだけれども、縁に応じて忽念としてパッパッと出て来る。そして何処へともなく消えて何も跡形がない。有って無い、無くて有る。それが心なのだと言う一節です。それを聞いて「確かにそうだ」と合点をしたのです。ここで慧能禅師は一隻眼具したのです。空を悟ったので

す。

既に仏典は翻訳されていて一般化していたらしく、樵の慧能もお経という言葉は知っていたのでしょう。すぐその雲水に「一体それはどういうお経なのだ」と聞いたのです。雲水は「五祖大満弘忍禅師の処で修行のかたわら覚えた金剛経というお経だ」と。自分の心がすっかり明るくなり安定をし、確かな幸せ観に満たされたものですから、未だ奥があるに違いないと。既に尋常ではなく、生死を越え時空を超越し、仏法の深淵にして重大な一大事因縁に目覚めた彼は、自分の境地を確かめて貰い分かって貰いたいばかりに、五祖の下へ行くことを決意したのです。法の為に身を忘るです。誰でもそうなるのです。自己が無くなった証拠です。

正直で一途な慧能はその事を直ぐ大檀那に話した。意気何者か遮る。一つだけ気にかかる事は、老いた母の事だと相談したのです。相談された大檀那は、是れを聞いて応ぜんずんば男が廃ると、大枚のお金を彼に与えるのです。それ程彼は周囲から期待され信頼されていたのです。いきなり「よし、後は私に任せなさい」と言わんばかりに大枚のお金を与えたということは、余程この青年に惚れ込んでいたからです。この男必ずや大物になるに違いないと。この大檀那も大した者です。人作りとはとかくそうした外護者によって生まれるものです。そのお金を持ち帰り、お母さんと永遠の別れをするのです。

親の恩は山より大きく、海よりも深い事はよく知っている。けれども親子の縁などはたかだか一代きりのものであり、どうせ私も死ぬのです。だが、今私が掴もうとしているこの法は宇宙大であり無限の命なのです。今生に於いてどうしても解決つけたい道なので、行って来ます。申し訳ないが、お母さんはこのお金で一生生きて下さいと。

真心の人であり愛情豊かな慧能が、母を捨てるということはいかばかりか。人の道に外れ、恩を仇で返す辛さが分かるだけに、その決意の大きさが分かります。道のために雪中に立ち、自ら肘を断つ。ただ大法重きが故です。二祖首を刎ねられても真実の法を守った。倶胝は小僧の指を切り落としてこの大法を得させ、南泉斬猫もまた大法重きが故に万古の南針を垂れたのです。大きく生まれて大きく恩を返すのが真の道人です。今彼はそう決意したのです。既に大法の前に目に立つ物は何も無く、ひたすら五祖に会いたいばかりです。

五祖は一見して一隻眼具しているのを見て取り、別扱いするのです。待ちに待った法器が現れた。五祖にとってこの喜びはひとしおであった筈です。釈尊に迦葉尊者の如く、達摩大師に神光慧可の如くです。

大成させるために最後の練りをさせるのです。悟後の修行です。大法の為に最後の試練石を与えたのです。大衆の中に入れず、米搗き係を命じて、大衆何百人の米を毎日毎日、朝から晩まで搗かせるのです。大きな慈悲です。単純な一つ事が、「只」単純に、何とも思わずに淡々と、こつこつと出来たらしめたものです。自己無きを徹底練り切る、只管で只管を破るのです。空で空を滅するのです。朝から晩まで「只」出来る様になったら大悟する事間違いないのです。

だから草引きでも片づけでも掃除でも、何でも淡々と「只」やりなさい。草が無限にあってもただ一本だけを抜くのです。これを朝から晩まで淡々とするのが生きた修行です。成り切ればよい、徹すれば自己が無くなる。この事は誰もが知っています。ところがそれがなかなか出来ない。何故か？　色々取り沙汰する内発的癖が、菩提心より強いからです。それに依って一つ事にのみ心を注ぎ切れない為です。前後を考え、効率を図り、もっと良い方法はないか、こんな事はもう飽きた、気が乗らない等々です。根本的に思考の系が

多様化し感情まで加わって並列作用する上に、元来苦痛や厭なことを避けて、安全で楽で面白い方へ向かう指向性が在るのです。だから自然に分裂状態となり、多方向間で交錯し刺激し合って目的への意志が掻き消されるのです。これがそう簡単に淡々と出来る訳がない理由です。こうした怠惰的なマイナス傾向の見えない拘りが、ぎっしりと心に纏わり付いているのです。これらをひっくるめて阿鼻の業というのです。これを一本化し単純化するのが初期修行です。このように初めは苦しくて、困難で、全然面白く無く、直ぐに気力が尽きて飽いてしまうものなのです。この限りない癖に対して、草取り一本がまともに出来ない程の努力で、只管のぶっ通しを願っても、根本的に出来る訳がないのです。だからこそ見性により抜け出た無我の楽さが、如何様に大きなものかが分かるでしょう。

ところが面白いこと楽しいこと、欲望を満たし心をわくわくさせる事とか、勝他念を喚起され、負けてなるものかと意地が働くと止まられなくなるのです。夜を徹して麻雀をしたり、飲んだり歌ったり踊ったりしても、興が益々興を誘って飽くことはないのです。

つまり好きなことなら幾らでも出来る、これが心の限りない働きであると同時に、不気味なのもこの自在さにあるのです。少しぐらいの努力などで整理出来る代物ではないのです。だからわざわざ修行と言うて、格別の忍耐努力がいることを強調しているのです。今、その事のみをとことん守り通さねば、その先一歩も深まらないのです。例え徹したかに見えても、忽ち崩れて只管から外れ凡情に落ちてしまうのです。これを越えるには、ひたすら只管を錬るしかないのです。今、今、何事に於いても心静かに「只」するのです。この練りが大脳を整理整頓し単純明快にするのです。言い換えれば、内に於いて壊す謀反人を消滅させるのです。隔てを取り自我を取ると言うことです。

始めっから最後までたった一本の草抜きが出来るところまでこぎ着けたら、もうしめたものです。悟りは間違いないのです。六祖は八ヶ月間、朝から晩まで米を搗いて「只」を錬ったのです。一と踏みだけです。つまり単純な事を単調に「只」する事が大切なのです。これが禅定を練ることです。今を練る、只管を錬る、単を練る、只を錬ると言うのです。仏道を行ずるとはこの事であり、深般若波羅密多を行ずるとも言うのです。

五祖は、もうそろそろ大成し出来上がっている筈だとふんで、頃を見計らって大衆に一大事の大号令を発したのです。今までの修行力を言うてみよ。祖意に叶った者に六祖を譲ると。その時、此処に出てくる神秀上座、この人有りです。人品卑しからず学識優秀、行解相応していて、皆から慕われ尊敬をされていたのです。師匠の代わりに講義まで任されていた程ですから相当の人物だったのです。だから大衆皆、それはもう神秀上座に決まっておると信じきっていたのです。

彼は早速一偈をしかるべき処へ書き出しました。

「身是菩提樹。心如明鏡台。時時勤拂拭。勿使惹塵埃。」（身は是れ菩提樹。心は明鏡台の如し。時時に勤めて拂拭せよ。塵埃を惹かしむること勿れ。）との名偈です。是の身は本来菩提樹の如く清浄無垢で、心は明鏡台の如く自我も拘りもない。本来そのままで成仏しているのだが、過去世の業障が纏わり付いて曇らせ、それが迷いとなっている。だから油断無く時時努力して、心を汚さないようにしなければならない、と言う意味の偈です。良い指示です。当に修行とはそうする事です。

五祖がそれをご覧になって「ああ、これは素晴らしい。皆この通りに努力しなさい。」と絶賛したため、師匠が認めた素晴らしい偈だと言うことになり、皆が口ずさむようになったのです。ある小僧が、例の偈を

口ずさみながら米搗き部屋へやって来ました。聞いた彼は謂われを尋ねたら、上来のおふれということが分かり、神秀上座の偈であることが分かったのです。

そもそも五祖がその様な一大事因縁を公言する以上、大法の一大事ですから、今や道を得た以上は無視出来ないことです。神秀上座の偈は確かに素晴らしいが、真実の大法を未だ知らぬ。未聞在だと看破した以上大法重きが故に見過ごす訳には行かない。しかし樵りですから目に一丁字も無いため、読むことも書くことも出来ない為に表しようがない。それでその小僧に「わたしも言うて見たいので、すまんがわたしの言う通りを書いてくれんか」と頼み、夜に行ってその横ちょへ書いて貰ったのです。それがあの有名な偈です。

「菩提本無樹。明鏡亦非台。本来無一物。何処惹塵埃。」（菩提もと樹無し。明鏡亦台に非ず。本来無一物。何れの所にか塵埃を惹かん）と。道ならぬ物は無く、山川草木悉皆成仏で、更に樹の樹とすべき物など無い。天地一杯の明鏡に台とすべき物は無い、台もまた明鏡に非ずや。本来因縁所生の法、ただ縁の物でその他に何も無いではないか。汚れなど何処に有ると言うのか。これが究極を言い尽くした偈です。

それを五祖がご覧になって、徹底した境界に満足されたのです。けれども目に一丁字も無く学識も無い。人望も信用も無い。何の作法も分からない者が六祖となったら、必ず法難に遭うて殺されるやも知れぬ、と案じられたは宜成るかなです。ある本には、履いておった草履で、「これは良くない」と言って掻き消したとある。危険であったことは確かです。

五祖は密かに米搗き部屋へ行き、「米は搗けたか」と。いわくの一声です。この為に放った大広告です。一大事因縁を携えてわざわざ訪れたはただ事ではない。もうそれだけで以心伝心です。六祖も待ってましたとばかり、「もうとっくに搗けています。ただふるいに掛けていません」。師匠の点検証明が未だでありますと満面の自信。境界は既に偈によって充分であることが分かっていますから、後は面授面稟、師資相伝の訣を要するのみです。

五祖は、「夫れが大事なのだ」と無言の指示をするのです。杖で杵を三打して去るのです。点検証明伝法をするから、三更（真夜中）に来いとの意、正に以心伝心です。師資共に法しか無いから心は丸見えなのです。

夜中の師の部屋は灯りを小さくして気配を殺し、釈迦牟尼仏の鉢とお袈裟を見せるのです。これは真の伝法を証明する為に代々伝えて来たもの。先師四祖大醫道信禅師から授かり、今お前に授ける。しかと大法護持せよ。六祖となった慧能禅師に仏法の全分を託したのです。

肝腎な伝法が済んだ今、一刻も早く立ち去るがよいと、自ら櫓を漕いで揚子江を渡して逃がしたのです。別れに臨んで、「法縁熟するまで身を隠して聖胎長養し、市塵へ出るなよ」と忠告したのです。これは人間とし人としての練りが足りないと、軽んぜられて大法が汚されるからです。遂に風動幡動の法縁に接し、機熟するを知って、此処に於いて初めて自ら六祖を名乗り、天下に真髄の仏法を敷衍することになるのです。

ここからも又極めてドラマチックな話があるんですが、今日の本文と違うので、ここまでにしておきます。六祖大鑑慧能禅師は祖師の中の祖師であり、最も親しまれ愛されている祖師です。老尼曰く「わしは六祖が一番好きじゃ。わしと同じで何の学問もなく、ただ道のみの人じゃからな。ははははっ」。ただし、老尼は当時の女学校を優秀な成績で卒業されています。教師が頻りに、どうか上の学校へ行かせてやってくれと親に頼んでくれたそうです。

長々と蛇足したので分かるでしょう。聡明さや教養品性等は一切関係ないのが仏道です。ただ真箇に徹し

て法を自在にしてこそ道の人であり、仏道を伝えることが出来る。要するに仏道は菩提心によって発露し、菩提心によって伝えられると言うことです。

「探って尋ぬべく、顧みて参ずべし。」
そこらを間違わぬよう迷わぬ様に、深く点検し反省して参禅弁道せよと。

「又年老耄及を嫌はず。又幼稚壮齢を嫌はず。」
年齢も問うな。誰をも侮らず、ただ道だけを見て人を見るなと言うことです。

「趙州は六旬余にして始て参ず、然りと雖も祖席の英雄たり。」
趙州禅師は六十歳を過ぎてから諸山明眼の宗師を歴訪し参師問法した。臨済にも欽山にも参じた。而も二十年間です。「七才の童児たりとも我に勝れば即ち学ばん。百才の衲僧たりとも我に劣る者は即ち教えん」との誓いを全うして、八十より初めて人の師となった祖師の祖師です。この趙州禅師は最も抜けきった祖師として崇められています。碧巌中最も多く取り上げられていることからも、その境界の高さが偲ばれるのです。我が瞎老が最も私淑した祖師はこの趙州禅師です。高齢だとて決して侮っては成らないと言う良き例です。

「鄭娘は十二歳にして久学す、能く又養林の抜萃なり。」
又鄭娘と言う御仁は十二歳で悟道しました。十二才は未だ子供です。志次第、法縁次第と言うことです。久学が面白い、道元禅師独特の使い方です。久しく学ぶ、参究し尽くしたと言う事です。道を得たら宇宙の主人公です。十二才とて祖師であれば、明眼の宗師と雖も侮れる者ではないのです。

「仏法の威は、加と不加とに見はれ、参と不参とに分る。」
威とは威縁の威で、内容と言う事です。仏法の内容は本当に徹して自己を空じ切らなければ得られるものではない。本当の内容が有るか無いかに拠るもので、それも正しい努力をしたかどうかに拠る。本当に正しい着眼で努力し、本当に参じ、本当に徹したか否かで、迷いか悟りかに分かれると。

「或いは教家の久習、或いは世典の旧学も、皆な禅門を訪ふべし。」
これは世間一般の事です。どんなことでも結局真剣に取り組んで努力することが最善の策です。と言うことは、その事に一心に没頭してこそその道の奥義に達する。だから皆な禅門を訪い坐禅すると良い。自己無く成り切って初めて真実の力が発揮出来る。だから世間の事柄も皆禅に学ばないと本当ではない。禅しか自己を極め、心の迷いを取る法が無いからだと。

「其の例是れ多し。南岳の慧思は多才の人なり、尚ほ達磨に参ず、」
南嶽大師慧思は天台宗開祖智者大師の師匠です。南岳懐譲禅師より二百年近くも前の人で別人です。南嶽大師とも呼ばれているので間違えやすい。慧思大師の師は慧文禅師で、共に達磨大師の時代です。達摩の達摩たるものは何か。言わずもがなの心です。達摩の心とは何か。九年面壁の消息です。只管打坐です。今の

消息であり廓然無聖です。多才であり秀才の南嶽大師は、直指人心見性成仏、一超直入如来地の家風に接して、更に自己を究め「只」を得て本来の大力量を顕したではないかと。その物に安住する程偉大な働きはないのだから、参禅を怠るなと。

「永嘉玄覚は秀逸の士なり、已に大鑑に参ず。」

永嘉大師はあの有名な証道歌の著者であり、南嶽懐譲禅師と同時代の、正しく禅門の英傑です。六祖に証明を受けに行った無師独悟の偉人です。金剛経を誦むの因み、読経三昧になって打発した人です。白隠下のお察も同様です。ではどうして読経三昧に成れたかです。本当に純粋、本当に真面目、本当に真剣だったからです。この時、余念の余地が無く、当然隔てが無く、その事自体です。思わず「只」読んでいた。読経も無く、自己も無く、「只」読んでいた。誰でもこのような状態に成ることはある。時節が純熟しきっていたから、徹底し打発し落ちたのです。純熟しているか否かです。時節が熟しているか居ないかです。因縁所生の法ですから誰もがそのような縁を持ち得ています。ただ勝縁と努力に拠るのです。九十九度まで漕ぎ着けても、一度不足したら気化しないのです。努力が足りないと徹し切らないのです。

大智老尼が、「そう言えば永嘉玄覚と言うのが居たなあ」と。「有名な証道歌を残されてます。」「見せてくれ。」見せたら「わあ、これは一発で此処まで来たのか。偉い者だなあ。」三日間位「永嘉は偉い。ようあそこまでやった。」顔を合わせれば「永嘉は偉い奴だ。ようやった。」と絶賛していました。

本当に素晴らしい境界で、証道歌は力が有り余って書かれています。道眼は勿論、その表現力と文才がです。実に聡明な人でよく勉強もされていて、その力で書かれておるものですから、美文でもあり、本当に見事な経典です。

それ程の覚証も、それ程の永嘉大師も、それが果たして真か偽か、自分では確かめられない世界ですから、六祖大師の点検を受けに行ったのです。つまり正師にキチッと参じなければ自然外道の法と成るのです。六祖が絶賛したのは、極め尽くしていたからです。あえて一夜だけでも泊まって行けと強いて宿めた。時の人、彼を一宿覚と言うに至りました。

「法を明めん、道を得ること、参師の力たるべし。」

道は師に拠って現れ、師に拠って真偽が別れるのです。ただそれだけではないぞと、次に続くのです。

「但だ宗師に参問するの時、師の説を聞て、己見に同うすること勿れ。」

師に参じ問法する時、自分の聞き方をしてはならん。どんなに素晴らしい法も、自分の考え方や解釈で聞くと、そこで既に邪法となってしまうのです。自分が気に入ったら取り、気に入らなかったら拒絶し批判をする。我見を取るのが修行なのに、我見を増長する問法は、道人ではないと言うことです。

「若し己見に同うせば、師の法を得ざるなり。」

「只」聞くことです。自我が邪魔をして師の法が入ってこないからです。

「参師問法の時、身心を浄らかにし、耳目を静かにして、唯だ師の法を聴受し、更に余念を交ぐべ

心を空っぽにして聞きなさい。無我で聞け。今まで培ってきた知識も学識も考え方も思想も全部かなぐり捨てて、全身を師に預けて聞けよと。

本当に「只」聞くことはなかなか難しいことです。言葉には意味があり、それを元にして思考系を訓練して来ましたから、既に確固たる系が出来上がっています。その又一方に分かろうとして聞いている自己が有る為、分かる分からんの二極分離が先ず働きます。ここで既に言葉に囚われているのです。

師は学人に対して早く悟らせてやろう、無色透明にし自由にさせてやろうと、真空の世界へ導引しようとしているのですが、吾我を立てているので師のままに導かれて行かない。それだから、耳目を静かにして、唯だ師の法を聴受し、更に余念を交えざれ。「只」聞くことです。

「身心一如にして、水を器に瀉ぐが如し。若し能く是の如くならば、方に師の法を得るなり。今、愚魯の輩、或いは文籍を記え、或いは先聞を纏へ、以て師の説に同うす。此の時唯だ己見古語のみありて、師の言未だ契はず。」

聴き方に正邪がある。「只」聴けば吾我はない。余分なものが無ければ即縁自体です。そのものばかりです。自他不二、身心一如です。徹して自己無ければ仏法現前です。水を器に瀉ぐが如し。若し能く是の如くならば、方に師の法を得るなりです。

自分の考えや学識などが一致し、師の言葉を理解したとしても、ああそうだ、分かる分かると頷けただけで、文字語句の奴隷に過ぎぬ。これらは愚魯、大馬鹿もので、師の真意は一向に伝わらない。本当に道を得たいならば「只」聴けよとの意です。

「或一類は、己見を先と為して、経巻を披き、一両語を記持して、以て仏法と為し。後に明師宗匠に参じて、法を聞くの時、若し己見に同ぜば是と為し、若し旨意に合はずんば非と為す。邪を捨る方を知らず、豈に正に帰するの道に登まんや。縦ひ塵沙劫も尚ほ迷若たらん。尤も哀むべし。」

それで確かな師に出会っても、そんなことだから自分の邪を捨てる手立てさえも得ることが出来ない。修行の手だてが得られないからどうしようもないのです。迷い苦しみを如何ともする事が出来ない。塵沙劫とは長い天文学的な時間、迷い苦しみ続ける。是れ程哀れな事はないと。

「参学識るべし、」

本当に求道して行く者は、次の事をしかと心得よ。

「仏道は、思量、分別、卜度、観想、知覚、慧解の外に在ることを。」

仏道はただ自己無きを証すれば良いのです。自己なければ迷い無し。更に何をか求む。思量、分別、卜度、観想、知覚、慧解。これら全て自己の計らいです。是れこそ迷いです。急にこれを止めれば、急に仏道です。知性の仕業を以て大自然の道を体得しようなどと、それこそ夢中に夢を追うです。絵に描いた餅は如何にしても食えぬと言うことを早く知れと。

「若し此等の際に在らば、生来常に此等の中に在りて、常に此等を翫ぶべし、」

想像の夢事は、所詮全て作り事に過ぎず、何時まで経っても顛倒夢想の悪い癖に弄ばれる。空しく生涯

を過ごして苦界に彷徨うだけだ。

「何が故ぞ今に仏道を覚せざるや。」
どうして即今、今この瞬間の消息に向かって参究しないのか。即今清浄にして何の汚れか在る、と究尽するのが仏道修行ではないか。見る底、聞く底、歩く底、これ仏道ではないのかと。

「学道は、思量分別等の事を用ゆべからず。常に思量等を帯ぶる吾が身を以て検点せば、是に於て明鑑なる者なり。」
学道は自分の始終を真実に行ずる事です。自分のしていることを観察し眺めたり是非したり分別したりすることではない。つまり意識の対象にした途端、隔てが出来て自己が立つ。試みに意識を逞しくして、素晴らしい食事を空想し、それを食べ、それらを味わって、その美味しさを精細に観念し思いを巡らせてみるといい。気分は幸せを得、幾らかの満足と安らぎがあるかも知れない。そこで本当に腹が満たされたか。本当に味があったか。空腹は癒されたか。それで食事をしたことになるのか。それで存分に働けるのか。自分のことだからよく分かるだろう。それらは全て観念や知性的創造物でしかなく、それを本当だと思っていた自分は迷いであり間違いだと分かるだろう。
仏道は計らい事、作り事ではなく、今、是の様子の侭が既に道であり真実です。真実の側から知らしめられる世界なのです。これを縁より悟入するというのです。成り切って自己を忘ずることです。

「其の所入の門は、得法の宗匠のみありて之を悉らかにす。」
十方法界、全て道でありながら、隔てによって自己が立ち、真実が眩んで分からなくなった今、如何にして自我迷道の闇を破るか。その確かな手立ては、確かに体得した明眼の師のみが知っている。どうして迷っているのか。何故囚われるのか。その本は何か。どのようにしたら解決出来るか。この場合、あの場合、どうしたらいいのか。こうした一切の様子を悉く知り尽くしているから、ひたすら正師の導きに従えば宜しいと。
何故法に於いてその様に自在なのか。それは自ら師について苦心し、正法をよく聞いて正しく努力し、確かに隔てを取って道を明らかにしたからです。自分を本当に知る者は道を知る。道を知るものは人を知る。これが正師の越格の力量たる所以です。迷っていた自分を良く知っているし、それを救った道を良く知っているからです。

「文字法師の及ぶ所に非ざるのみ。」
文字法師とは文字上、概念上の師を言うのです。空想、想像の上でしか語る事が出来ないので、仏道は夢の又夢ぞと。
仏道修行は本当の自己を究める。本当の自己を知る事を見性と言うでしょう。自分を知るには、自分に参ずるしかない。自分に参するとはどうすることか。今この瞬間の様子が、今の自分の全てです。だから外を探すと迷いとなるのです。余所に無いからです。この瞬間の自分を見失ったら、もう知るべき、解決すべき自己は無い。永遠に未聞在です。自分を極めるには「今」しかない。道元禅師は、「仏道を習うというは自己を習うなり」と、この事です。続いて、

「自己を習うというは、自己を忘るるなり」とある。今、自分上の事ばかりになって余念の入る隙が無くなると、している自己が無くなる。これが「忘るるなり」です。誰でも屡々我を忘れてやっているものです。自己を超越する入り口がここです。「只」することです。次に、

「自己を忘るるというは、万法に証せらるるなり」と。その事、その物ばかりになって微塵も余物の無いことです。動作に動作させられ、縁の侭と言うことです。次が大切なところです。

「万法に証せらるるというは、自己の身心及び他己の身心をして脱落せしむるなり。」成り切って自己が脱落した消息です。水と水、空と空が合して境目が取れて一つになることです。それ自体がそれ自体を知る必要はない。これが本当のそれ自体です。つまり有るとか無いとか理屈を言う自己が無くなって、からっとした世界。廓然無聖と達磨大師が言われたところです。南泉禅師も、廓然として洞豁なるが如しと言われました。これが仏道であり仏法です。仏性です。本来の自他隔歴の無い、知る物も知る自己も何も無い世界が廓然無聖です。観音流れを入して所知を忘ず、と釈尊が言われました。隔てのない様子です。

何事も「只」淡々とする。六祖の様に、朝から晩まで淡々と縁の侭に「只」するのです。それを努力するのです。これを心得として良き年越しをして下さい。一夜あけたら元旦です。真新しい年の始まりです。

年々時々年末、年々時々元旦です。時々始まり、時々終わらねば本当の命ではありませんよ。難しい事、特別なことをするのではない。何事であれ、真実に「只」するだけです。今、只、淡々と。では。

茶礼会

老　師・・　型やしきたりよりも大切な事がありますから、それを第一にして下さい。そう言う意味で、少林窟は世間一般の古典的な禅道場とは違いますから、余所では絶対通用しません。ぶん殴られて叩き出されますから、呉々も余所ではしない事です。

参禅者Ａ・・　先程お話し中に、外で電話してらっしゃる方がいて、折角良いお話しされてるのに、すごい邪魔だなと思って、僕はその時すごくイライラしてました。何でそんな事が分からないんだろうって。此処は仏教伝道センターなんだから、こんな大事な話をしてる時は外の話をしないで欲しいって、すごく怒りを覚えたんです。

老　師・・　成る程。

参禅者Ａ・・　で、坐禅をする事に依って怒りは軽減されて行くものなんでしょうか。

老　師・・　当然します。何故かと言うと、怒りも縁に応じた一姿です。その時の感情の動きに過ぎません。つまり反応の様子であり、癖として先に怒りが発動するだけです。それは人の話を受け止める。ここが問題の始まる瞬間です。受け止めなかったら何事も起こらない。何者が受け止めるのかです。自分が在る事によって反応してしまうのです。刺激と反応は自然の様子ですから、是でも非でもないので、気にすることはないのです。が、構えた自己が有るから問題が起こる。構えた自己が有るから、問題化した自分が気になる。こういう悪循環機構は早期に改めた方が健康的です。

坐禅は他を見ないことから始まります。心を外へ向けずに自己の内を照らす努力です。平たく言えば心を拡散させないで、自分自身の心を見失わぬように注意し続けることです。だから人の話に心を盗られなくなるのです。耳に入っても取り上げないので気にならないのです。つまり「只」聞けば何事も無いのです。さ

らっと終わるので、怒り現象が起こらないのです。人の話しを無視してるのじゃないのですよ。他者の世界に対して妄りに踏み込まないことです。関係のない事に対しては、無駄な反応をしないことです。例えば死ぬしかない時に、更に生きようと抵抗したり反応すると、出来ないことを願うだけ苦しみが増幅し、それがいよいよ苦しめるのです。死ぬしかない時には、死ぬしかないのです。任せて知らん顔を決め込むことです。

「只」在れば、自分の心が自由になると言う事です。実に爽やかで面白いですよ。

参禅者Ａ・・　それは素晴らしいですね。僕は周りのそう言った条件に、自分の心が何時も掻き乱されるのです。

老　師・・　皆だから貴方だけじゃない。

参禅者Ａ・・　ああ、そうですね。先程の場合は一度の縁で済むからほっとけば、ほっとけられるんです。でも職場とか家庭の中では、何時も同じ縁が取り巻いてる訳ですよ。そうするとその怒りが、一度目は少しでも二度目、三度目、四度目になるとその怒りが増幅されていき、自分でもそんな自分が悔しいのです。

老　師・・　そうですね。貴方はとても正直です。

参禅者Ａ・・　それを軽減出来れば、更に怒らなくなったら、僕に与えられたこの命、短い貴重な生涯が、周りの人にも幸せを与えて行く事が出来るんじゃないかと思うのですが。

老　師・・　その通りです。それには、先ず心に持っている価値観を捨てることです。静かにあらねばならないとか、この場合はこうあるべきだという様な自分を持っていると、それに反するものと衝突するのです。そう言った構えがなければ対立する者がありませんから自然体です。何事も起こらないのです。これが平和です。葛藤し衝突するのは、自分が拘っている思いの塊があるからです。濃厚であればあるほど執着力も大きいので、自分を縛り付けている力も大きい。だから他と衝突することも多いのです。我見と言うことです。これが正しいのだと言うものを持ってしまうと、別の正しいとするものと衝突するのです。本当の正しさは争わないことです。これが平和だと言う理屈を持ってしまうと衝突を起こすのです。それで戦争になるのです。正しいとか、平和だとか、真理だとか、何でも理屈に拘ると災いを起こす、必ず。平和は理屈や道理ではない。「只争わない」ことです。真の平和は信頼し合うことで充分です。その為には拘る自我を捨てることです。自分流の理屈を捨てられない者が、人を受け入れ信頼するはずはありません。心の構造として不可能なのです。

平等とか福祉もそうです。道理でも理屈でもない、支え合い助け合うことです。理屈で与えることではないし、貪ることでもないのです。それには無理のない良い縁を国レベルで制度化し、諸処の行政が人間らしい温かい心を以て縁に応ずることです。されど何事でも公平平等は難しいことです。平等というものに執着すると、問題が起こり争いが起こるのです。そこで平等たらしめる為の差別が必要なのです。平等に拘ると不平等を生み、差別に拘ると悪差別を生むという大自然の道理が在るのです。もっと自然の道理を知る必要があるのです。つまり真の平等には健全な差別が必要であり、真の差別には健全な平等が要るのです。

さて、先ずは心を乱さないことです。怒らないことです。その為には、心を見失わぬ事です。そのために自分流の理屈に囚われぬことです。参禅の有り難いところは、そうした癖を自然に溶かし落としてくれることです。これが「只」の力です。とにかく努力です。

参禅者Ｂ・・　それで、死ぬしかない時は諦めるとおっしゃいましたが、何処で生きる為に奮闘すれば良いのか、諦めて死ねば良いのかと言う、その決め所と言いますか。又頑張って生きるのも大変な訳だし、ま、

なかなか死のうと思っても死に切れないけれども、その辺の決断のしどころみたいなのはどうなのでしょうか。

老　師・・　今既に生きているのですから、その上生とも思わず死とも思わずに生きる事です。死ぬ時は死ぬ時の事です。その時の法です。今無い事柄に、敢えて構えることは、徒に不安を呼び恐怖感をそそることになるだけです。

参禅者B・・　それでさっき先生は、世界が平和になる為には、この道を教育に反映して行くことが好ましいと言う様な事をおっしゃった。勿論僕もそう思うんです。また平和と言う理屈を持つ事が、又争いを起こすと言うジレンマがあるんですけれども。でもやはり全世界の人が、自分を確かに究明しなければ平和にならないだろうなと思います。やはり悟ってしまえば法を広めざるを得ないと言うか、そう言う使命の為に生きてらっしゃるんでしょうね。やっぱりね。

老　師・・　そうです。それで全世界で悟った素晴らしい指導者が何万人も居たとしますよ。

参禅者B・・　はい。

老　師・・　大概八～九〇年の命ですから、やがてその人達が亡くなるでしょう。

参禅者B・・　はい。

老　師・・　そしたらそうでない次の人達が又世の中を支えるでしょう。

参禅者B・・　はい、はい。

老　師・・　その人達が又色々な理屈を立てて衝突をするから、又争うのです。では何が有効な手段として残るのかと言うと、教育しかないのですよ。要するにちゃんとした人達が、「今このように平和なのは人を重んじ、お互いを信じ合い、己を慎むから平和なんだと言う教えが、次の世代に伝わっておりさえすれば大丈夫なんです。

参禅者B・・　悟ってなくても教育の力で平和な世界が作れると。

老　師・・　そうです。つまり己を律するものは何かと言う事と、健全な自尊心と正しい信念をしっかり培うことです。家庭においても学校においても国家ぐるみで健全な自尊心を培うことです。己を律する信念は、健全な自尊心や意地無くしては有り得ません。これが社会秩序の本であり遵法精神となるものです。とにかく人としての自覚が大切です。それを守ることを信念にし、夫れを実行する自分を信じる。これが健全な自律精神です。

こうした精神を根幹にして知性を高めていくと、科学的な精神がぐんぐん発達します。当然必要な疑問精神が育ちますので、根拠も無く無知性に疑ったり信じたり、憎んだり拒絶したりする愚は自然に解消されるのです。そんな円満な人格に育つのです。無闇に人を怪しむ事がないから争いが起こらないのです。

今こうして一緒に居るでしょう。誰だって一人一人の中には怒る作用も自己絶対・他否定の精神もある。闘争精神も殴り飛ばす力もある。けども今そうした事が一切無いでしょう。何故か？　我々に今、本になるそうした念がないから、一切の作用が起きないのです。怒りも憎しみも疑いも無いから起きようが無いのです。心にそうした作用が無ければ、戦争など決して起こらないのです。逆に、一人一人の中にそうした要素があったなら、何時でも争いになると言う事です。確かな教育が、確かな人格を形成する。それは先ず両親の教育であり、教育者の教育と言うことになるのです。要するに真箇の指導者が必要なのです。

参禅者B・・　それで戦争が無い平和な世界が出来ると。素晴らしいですね。別問題として、今凄い食料不

足がやがて来ると言われています。現実に飢餓でいっぱい人が死んでいます。中国の人口増加と経済発展に伴う資源の消費なども影響して、何年かしたら食料を始め色んな不備が起こってどうにも成らなくなるような気がします。

それでこの法が広まれば悟った人、決着が付いた人達も当然大勢出現します。一方現実的な諸問題で大変な世界に成った場合、わしはもう何年生きたから先に死ぬわ、と言って潔く死んでくれる。そう言う大らかな世界が禅なのかなあと妄想し夢想してみるんですが、どうなんでしょうか。

老　師・・　道を得た人が食糧事情の為に自ら潔く死ぬことは、十が八九在りません。何故なら、もっと根源的な解決策を採らなければ駄目だと分かっているからです。因縁性空ですから、一人々々がやろうと思えば出来る事なのです。悟らなくてもしっかり自律性が育った円満な人格さえ具備していれば、これ以上人口を増やしたら人類全体絶対不幸になる。贅沢をしたら資源からエネルギーから自然に於いても限界が来て、結局全体破滅になる。じゃ自分だけでも自重しようとみんなが心掛けて実行すれば、人口問題を初めとして全てが国の方針に従ってなされて解決出来るのです。

そして又、健全な自律は自立を伴うので、人間としての温かみや優しさが豊かに作用します。リアルタイムで世界の情勢が分かる時代ですから、餓死している気の毒な様子を知ると、贅沢を慎みあっちへ送って少しでも助けにしようと言う心になるのです。貪りの心が無くなり慈悲の心が作用するからです。凡夫と仏の違いは、貪りが心を支配するか、慈悲が働くかです。心の束縛さえ取れれば、三度の飯を二度にしてでも、人の死ぬと言う一大事に対して、うん、助けようと言う気になるのです。人間はそのように美しく働くようになっているのです。自分が美しく素晴らしいに越したことはないし、醜い自分は厭なのです。それが素直に直線的に作用するよう、この大乗精神を指導するので、自分が死んで数を減らす対策法は取らないのです。隔てを除去してみんなの心を健全にするために、いよいよ長生きを心掛けて良き指導者を作るのです。

先ず自分を信じる力を培う事からです。互いに信じ合えば、直ぐに平和な世界と助け合いの世界が出現して、飢餓も忽ち無くす事が出来るのです。無用となる軍事費が活かせるからです。自律性と確固たる自尊心と信念が無い限り、到底三度の飯を二度にしてでも、心から人を助けようと言う信念は産まれないのです。自我が無くなれば、誰もが心を自在にして最も美しく作用するのです。

参禅者C・・　わたくし前回初めて参加させて頂いて。それで帰りに老師にご挨拶をしたらやたらと涙が出て来ました。理由はないのです。それは悲しみの涙ではなくて、魂の癒しの涙だと言われました。それが有り難くて、帰る途中も止まらなくて。一年半位色々ありましたから、こんなに私も心が疲れていたんだなと、その時分かりました。私は感情を感じる事は素晴らしいと思うけれども、それに振り回される事はもうご免だわと思っています。やっぱり超越と言うか、穏やかに何時もいたいと言う要望が強くあります。

今日来て一応坐禅することが出来ました。色々な今までのことが雑念となって出ていたものが、段々出て来なくなって静かになってきました。そこでお尋ねしたいことは、坐禅をして悪い時と言うのはあるのでしょうか。無いならば、激しい乱れの時などの対応として、何かコツがあるのでしょうか。又、家族とか周りの人達を見ると直ぐに感情に振り回されので、そうならない方法か何か在るのでしょうか。私はこのように感情に激し易い為に、色々なことが重なって神経失調症に成ったことがあるので。

老　師・・　坐禅をして悪い場合は有ります。身体上に問題がある時には坐禅と言う形には拘らない方が良いです。ただ心の坐禅はした方が良いです。感情も含めて心が静かになり単調になる為の努力ですから。し

かし単調になろう、なろうとして、気ばかりが先行して益々落ち込んで行くタイプの人は、坐禅はしない方が良いです。まだカラオケでも歌って、美味しい物を食べた方が実際的です。

単調になろうとしたら、単純な事を単純に「只」することです。けれども単純になろうとして、自己を運んで手段方法を求め過ぎると、却って複雑化し苦しむばかりです。そういう人は、ストレスになり禅病に成りやすいので、却って格闘技とかスポーツの方が治まり易いのです。身体は本能の塊ですから、計算通りに行かない事が多いのですが、それが重なると異常に乱れる人がいるのです。坐禅して悪くなると言うことです。

だから坐禅をして良いか悪いかは、身体的な面と坐禅に拘りすぎて禅病になるようなタイプは、状態に拠るので注意が必要です。そうでなければ、正しい坐禅は心の万能薬です。人間関係による感情の惑乱も、一呼吸が自然体で出来るようになれば自ずから滑らかになります。心を盗られなくなるからです。そこまで向上しない間の人間関係はどうするか。それは出来るだけ距離を取ることです。空間的心理的に工夫することです。特別な対処法は無いと心得て、平素の努力を怠らぬ事が、やはり根源的な解決策です。努力に勝るものは無いと言うことです。

参禅者C・・　やはり何時も坐禅をする気持ちになり、少しでも努力することですね。お陰様で普段はそう言う環境に左右されなくなったんですが、やはり突発的に何年かに一回大きなショックがあって挫折しても、坐禅する気になる様に自分を仕向けていくことですか。

老　師・・　そうです。貴女の今おっしゃってる事、とっても大事な事で全員に共通してる事なんです。何が一番大事か。誠実に努力することです。何時でも責任を持ち、誠実に目的を自分らしく果たすことです。その心得として、淡々とさらさらとすることです。だから何でも単純に「只」する。成り切りながら拘らない。これを信条に生活することです。台所も片づけも、歩く時も勉強も、何でもさらさらと素直にするのです。次第に頭の中が整理され、もたつきが無くなります。今はこれをするだけ、と割り切れるようになるのです。自分の心を自分で整理する力が付いてくるから、イライラも自然に治まるのです。これが出来ない人は、一旦揺らぎ出したら中心を失い、忽ち惑乱葛藤するのです。心をぽっと切り替える力を培うことが、自分を救うのです。

参禅者C・・　さっきの坐禅ですが、深い状態と言えるのでしょうか催眠状態に似ている感じがありました。想念から離れた静かな状態。平安のポイントに行き着いたような、身体の感覚が無い様な状態になった時、じゃあ、終わりにしますと言われた時に、すっと覚めない感じがありました。凄く深く入った気持ちでした。この感覚は・・・。

老　師・・　揺らぎが納まるとそうなるんです。良い事です。それだけ貴方が真剣だったと言うことです。正しい努力にはちゃんとそれだけの結果が出るのです。

参禅者C・・　この時間は長い方が・・。

老　師・・　長い方が良いです。ロボットの様になったでしょう。あれが大事なんです。ロボットの様になって淡々と、さらさらと「只」するのです。

参禅者C・・　でも頭が覚めた時に動いてない状態ですが。

老　師・・　今は動く必要がないですよ。計算する時には動かなきゃいけませんが、今要らないんだから動く必要はないでしょう。ここです。無駄な事に徒に心を用いて自分で迷うのです。それを自然に戻し、無用

な事に心を弄さないのが禅です。
参禅者C・・　何かぼんやりしちゃったんですが。
老　師・・　良いんです、それで。鈍化したととればぼんやりですが、安定したと取れば一点に治まり静まった様子です。感情も知性も意志も一つになり、ピタッとしたのです。
参禅者B・・　「只」導かれると言う事ですね。
老　師・・　そうです。そこで理と事との違いをよく知って下さい。理とはことわり、道理ですね。道理は計画も入るのです。事は事実であり実践も入ります。具体性その物、客観性その物、作用その物です。事がないと結果が出ませんね。物事の方向性を定め、計画を立てる時は理の世界です。そうすると事の前には無駄も過ちもないように、ちゃんとした行き届いた計画を立てる事が大事です。これが理の世界です。
　プログラムが出来たらそれに素直に従って実行する。今度は事の世界ですから、具体的に実行すれば結果は自然に成る。理は理、事は事。全然違うので、考える時の道はしっかり考える事です。実行の時は正確に「只」行えば良いと言うことです。学ぶべき道は、理と事に有るので、一方に偏しないことです。しかし幾ら考えても結果は出て来ない。実践具体化の結果だから。そうすると理と事とは一体で在ることが分かるでしょう。理無くして事無く、事無くして理無し。身心一如も又然りです。「只」の偉大さを自覚して下さい。
参禅者D・・　親鸞さんがですね、教えが真っ当に伝わってないのは、何か五つの要点を無視したって聞いたのですが。
老　師・・　宗祖ですからね、親鸞さんなんて友達呼ばわりしてはいけません。
参禅者D・・　ああ、すいません。親鸞聖人。
老　師・・　日本の誇る宗祖の一人ですから。宗派が違うからとか何とかじゃなくて、素晴らしい指導者であり、祖師ですからやはり尊敬の念は忘れちゃいかんです。
参禅者D・・　はい、はい。
老　師・・　親鸞聖人がお書きになった五箇条の要文と言うのがあるんです。これ素晴らしいんです。これをカットしちゃったんです。
参禅者D・・　今、伝わってないんですか？
老　師・・　彼等の中にはね。禅の方に伝わってる。
参禅者D・・　それはどういう事です。
老　師・・　義光老師がね、「親鸞のはらわた」と言う本を書かれています。
参禅者D・・　ああ、あります。持ってます。
老　師・・　あれが五箇条の要文です。それを提唱したものです。義光老師も親鸞聖人の見性の確かさ、悟りの確かさを誉め讃えておられます。最近、可藤豊文さんが、法藏館から「親鸞聖人五ヶ条要文」と題する本を書いています。後書きも興味有るものです。
参禅者D・・　本当の親鸞聖人の信者の方はそれを読んでない訳ですか。
老　師・・　そうです。
参禅者E・・　妙好人と言う人がいますが、その人は親鸞聖人の五箇条の要文を見て、実践して悟りを得た人ですか？
老　師・・　道の深さは分かりませんが、親鸞聖人の意志に従って念仏三昧に入ったことは確かです。

参禅者E・・　江戸か明治の前。
老　師・・　そうです。妙好人と言うのは固有名詞ではありません。ごく最近までおったんですよ。身は娑婆に置きながら偽物のお坊さんをよく啓発してね。揺すぶりをかけたり、脅かしをかけたりしながら、そーっと法を伝えて行った人達のことです。自らは枯淡で高潔な生き方をしていました。宗教家以上に宗教家らしい信念を持って活きた人のことです。
参禅者E・・　その五箇条の要文はどうして伝わってきたのですか。
老　師・・　書き取られて伝わったものですが、近年に公になったのは義光老師が「親鸞のはらわた」という題名で著したからです。例の本です。初版は昭和四年のことです。他の人から聞いた話ですが、是れを著してからあちこちの講演依頼が増えて、その度に今の親鸞教を批判するものだから、義光老師は付け狙われて、その為に腕に覚えのある紳士がずっと護衛していたと言うことです。その事を義光老師に確かめたら、笑いながら手を振って、「じゃから、お前も正しいからと言って人の悪口だけは言うなよ。えらいことになるからな。」と言われましたね。
　北海道から来られた御仁、今日は何処にお泊まりですか。
参禅者I・・　近くのビジネスホテルです。
老　師・・　ああ、そうですか。北海道から来られると言うと大変だと思うんですけど、その辺りの菩提心と言いますか、やる気と言いますか、ちょっと聞きたいですね。
参禅者I・・　いえ、いえ。昨日ホームページ見たら、ああ、そう言えば明日がそうだったんだなと思ってたらチケットを買ってたと言う。それだけです。
老　師・・　凄いな。単純明快で良いな。こう言う頭の使い方が理想なんです。
参禅者D・・　どういう事なんですか。
老　師・・　要するに目的に向かうおうとする時、遠いからとか言う内面で壊す心が無いからです。単純明快なんですよ。よし、行こうとそれだけだから心が統一していてすっきりしているのです。マイナス条件を持たないだけ実行力に優れているのです。
参禅者D・・　そう言う時に、明日用がある時はどうするんですか？
老　師・・　それは動けませんよ。先の約束を反故にすることは、反社会的行為ですから、その代償は場合によっては大変です。しかと了解を得てでなければしてはなりません。特に道の人ですから。でも、六祖の母の件もあり、裏切りではなく大きく開華する為の仕方がない場合もあるので、それもこれも菩提心が解決してくれます。それが修行です。只聞いて、通り越させるのが修行です。心に持ち込まないことです。
参禅者J・・　それは超越するって言う事ですか。
老　師・・　そうです。引っかからない事が超越する事です。見聞覚知全てです。
参禅者B・・　意識は意識その物で平安になれるものですか。それとも坐禅によって意識が安定して平安になるのですか。それとも人間は、仕事をして家族が健康でと言う風に、或る条件を満たさないと意識は平安にならないのですか。それとも坐禅をする事によって、今、この意識の平安があるって言う事は可能なんでしょうか。
老　師・・　色々一遍に言われましたが、何れも心の様子ですから、隔てが取れて今に治まり、「只」縁に応ずれば同時に皆解決します。何故かと言うと、意識は善でも悪でもない。それ自体が光明なのです。光明

は働きです。太陽は明るいことが働きであり光明です。水は冷たく潤すのが作用であり光明です。意識がなかったらロボットと同じで、善悪も真理も分かりません。ただ徒に生存しているだけです。意識自体は善でも悪でもなく、縁に従って作用するだけです。しかしそれが無ければ人間としての作用は無く、人間としての価値は無いのです。是れが光明です。その他何も起こらないのですから、意識自体を更に問題視する必要はないのです。意識を更に取り立てて意識するから迷いとなり惑乱するのです。だから天然の侭にして置く事です。その時の意識のままにして、それを横から醒めた目で云々しないことです。意識自体が意識することはないのだから、「只」そのままで良いと言うことです。本来何事もないのですから平安なのです。それが隔てによって意識を意識する構造にしたのです。それが撹乱するので「只」出来ない。だから修行する必要があるのです。それが坐禅修行です。

参禅者B・・　意識を無くさなくても良いんですか。

老　師・・　無くす必要はないし、無くすことなど不可能です。そんな無理なことをしようとして坐禅すると、徒に苦しむだけの坐禅となります。ただ意識に囚われないことです。意識自体は無意識なのです。これを不思量底とも非思量とも言うのです。要するに無意識を意識するのです。ゼロに幾ら掛けてもゼロです。無い者を無いと本当に知ればいいのです。意識していたら無意識は分かりません。「只」縁のまま、生滅で、前後を見ないことです。瞬間瞬間切れておる、この今今、無常の流れに乗っかっちゃったら良いんです。

参禅者B・・　乗っかるんだ。見るんじゃなくって乗っかるんだ。

老　師・・　そうそう。そして引きずらない事。次に移っちゃって、もう無いんだから。無いものを見ようと、横から眺めるから問題が起きちゃう。

参禅者B・・　瞬間に成っていけば良いんですね。

老　師・・　そうです。身と心とが離れてるとどうしてもそれをやるんだ。

参禅者K・・　救いってのは、その事を意識しない事ですか。

老　師・・　意識を意識しない事。見ていながら見ていると思う自己が有るから隔たるのです。必要がないことを本当に体得すれば良いのです。

参禅者K・・　それを自己がないと言う事ですか。

老　師・・　そうそう、拘らないって事です。

参禅者K・・　と言う事は、僕が今意識で救いと言う事を概念で捕らえようとしている、その概念を持ち出すことが間違いって事ですか。

老　師・・　その通り。はっきり言えば間違いなんですよ。

参禅者K・・　と言う事は、僕の存在と言うのは、その意識で存在を認識してるのが自分なのですか。

老　師・・　その通りです。そんな意識上の自分が有るから問題が起きるのです。

参禅者K・・　と言う事ですよね。と言う事は、悟ったら存在と言うのは、求めている自分も意識も関係無い。悟りとは意識とかの観念とは違う、全く別世界って事ですか。

老　師・・　そうです。意識や観念の世界では無い。自分の見聞覚知で分かるでしょう。

参禅者K・・　成る程。と言う事は、今の自分と言うのは意識の自分ですね。その意識の自分が、更に観念で作り上げた価値観で迷わされるのだから、死なないと駄目って事ですよね。

老　師・・　そうです。死ぬって事は、持っておるそう言う意識を殺す、つまり越えると言う事です。本当

の今に目覚めたら、そう言う観念的なものは自ずから消滅してしまう。
参禅者K・・　て言う事は後悔する可能性があるって言う事ですか。悟ったら。
老　師・・　悟ったら後悔なんかする訳が無いでしょう。
参禅者L・・　価値観が変わる。
参禅者K・・　価値観が変わるって事ですか。
老　師・・　価値観も持たない。持つ自己が無いのだから当然です。例えば迷い、苦しみ、執着と言うものは、自己が有るから囚われるし、そこから惑乱し葛藤する。心と言うもの、自己と言うものが無ければ、認識そのままだから何事も起こらない。価値観は自分の見方であり、紛れもなく小さな自己の塊を意味します。要するに執着です。それを認めるのも自己、それを持つのも自己、受け止めるのも自己です。とにかく隔てがある限り自己が立ち、自己が有る限り価値観だとか考えで執着を固めてしまう。この癖を根底から壊すことが救いとなるのです。一回自己を捨てるんです。

例えば、水が入ったバケツを持ち歩くとどうしても波が立つ。だから一旦バケツを置いて手を離す。そうすると静まる。だが又持って歩く癖が付いているので波が立ち濁れてしまう。だからバケツを離し、持とうとする自己を砕く。これが解脱です。つまり意識を駆使しつつ、囚われる自己がないから意識のままです。感情のままです。この野郎と思った時には終わっている。何も無いのです。価値観を形成し、夫れを持つ自己が有れば、必ず事が起こるのです。相手と衝突するからです。とにかく早く一呼吸に徹することです。大切な急所が手に入ると、自己のない。そのもの自体でやれるようになるのです。

参禅者L・・　質問して良いですか？　テレビなどから目にし耳にする言い方で、元気を貰うと言いますね。貰うって言う言い方に、私は違和感を感じて随分引っかかる。元気は貰うものではなくて、つまり老師から頂くものでも、誰からも貰うものでもない。自分で元気だって思えば元気が出る。それは何時も自分を励まし、勇気づけ、何でも前向きに対応して、落ち込まないようにしていれば良いみたいです。つまり今現在の自分が、ハッピーかアンハッピーかに直接関わることだと思います。どんな境遇に居たって、どんな苦しみだって、それがそれなんだ、今は是れなんだと全面容認出来れば、それはそのままハッピーだろうと。日常的に、自分の意識の切り分け、切り替えが大切ではないか。悟りの見地からどうかは私には分からないけれども、無差別に限りなく流す無用なマスコミの情報は、知らず知らず闇を背負い込む様な事に成っている気がします。私達は無意識に、無用な情報の為に心が侵されてしまっいて、いつの間にか自己不信になり、何時も他が気になりマスコミが気になってしまったのではないかと思うのです。だから僕は将来の世代の為に、マスコミには色んな事を注意して貰いたい。内容は勿論言葉の使い方もそうです。元気を貰う、と言う依存型の言い方より、自発を促すような言葉遣いを流して欲しい。今の編集には、人間的な文化性が希薄で、商業主義に傾き過ぎていて、非常に疑問を感じてますね。
老　師・・　確かに。同感です。ただこうも言えます。その人に会わなかったら自分の元気に気づかなかった。その事を、貰うと言う訳です。要するに、心を常に真新しくして、過去を捨てることです。動機がなければ出来ない場合があるので、良い縁に触れる必要があるのです。正にその人の心の様子ですから。結局健全な夢を大切にしているかどうかです。気力でありやる気であり情熱です。私も大賛成です。ただし自分の夢だけを追っかけている者は必ず挫折します。励ましも理解も支えも得られないからです。誰だって同じです。だから他者の夢を大事にしながらやって行く所に、平安と元気が常に保たれるのです。人間は自他不二、

同事の因縁が有るからです。
　争いから生産は無い事も分かります。理想や夢には必ず忍耐努力が必要です。夢を説く時にはこの事を忘れてはならんのです。理想や夢には挫折は無いのです。挫折した時は夢が消えた時です。夢は実体がありません。つまり終わりは無いと言うことです。終わりがあるのは拘りの自己が有るからです。理想や夢が無い人は、我慢や努力に限界があり、直ぐ切れちゃうんですね。歴史的に優れたリーダーは、ちゃんとした夢人です。常に大きな夢に人生を掛け、みんなの幸せを祈っているものです。
参禅者B・・自分と他の利害と言いますか、そのパーセンテージなんですけど、自分の利と他の利と五分五分位が良いんでしょうか。
老　師・・　お互いがそう言うつもりなら常に平和です。片方が百パーセント取ろうとすることから、詐欺も騙しも虚偽も産まれるのです。一個のパンを百人で分かち合って食べる力があったら独り占めする気にはならんのです。
参禅者B・・　逆に相手の利のパーセンテージを多くするって言うのはどうなんでしょう。
老　師・・　それは結構な事じゃないですか。レベルが同じものはないんですから。だから落ちている時にはパーセンテージを上げてあげないと。それが度量と言うものです。平等と差別が有るから、均衡を取ることが出来るのです。器の度量は大きい程将来が安定するのです。何故かというと、自分が損をしても相手を育てる度量に拠って、夢を人に託すからです。先行投資です。これがないと、一時は水平状態で皆が平等で良いと思うかも知れませんが、それが落とし穴です。能力と立場と、つまり諸々の条件が皆異なっているので、どんなに平等にしても、それが悪差別を産んでしまうのです。
　差別があってガタガタが自然であり当たり前なのです。だから条件の悪い人を援護し底上げしてあげなくちゃいけないのです。それは本もとが差別の上に成り立っているので、度量と言うものが、腹芸が出来る人が必要なのです。こうして平等が保てるのです。もっと差別を重んじて、お互いが腹芸の出来る度量を持ち得ていたら、こんな悪平等社会にはならないのです。
参禅者N・・　やっぱり希望ってのは夢ですね。この間知り合いの牧師が、キリスト教は希望の宗教、仏教はあきらめの宗教だと言われました。
老　師・・　一面では当たってますよ。諦める事は、切り捨てる。過去は過去として明快に切り捨てる力です。拘りを捨てることですから。その上で未来に夢を抱く。そう言う意味合いで善く取れば当たっています。諦める力が無い者が夢が持てる訳がないでしょう。
　どんな宗教でも理想を説き希望を教えています。勿論キリスト教もそうです。しかしキリスト教は自分の教義以外のものを認めなかったでしょう。だから科学的真理を説く科学者や異教徒を、宗教裁判と称して大勢殺したでしょう。どこかがおかしいでしょう。それは宗教に囚われているから、心に余裕が無く、異論を理解し受け入れる度量がない為です。そういう囚われ、囚われる自己を越えていく道が、その宗教の本領に機能して無いからです。仏の教えはひたすら拘る自己を捨てて、本来の天然の姿に真実の救いを見出す教えです。それぞれの夢や理想を大切にすることです。人を認め合うことであり、差別のまま、分に安住して他に囚われないことです。
参禅者U・・　否定されるかも知れませんが、悟りは二元論や個人的な価値付けなどが出来るもんなんでしょうか。

老　師・・　出来ません。ただ二元論と言わずに、個々を明晰に区別をする。個々独立している法を重んずるための方便として分けると取れば良いでしょう。道とは拘り無しに区別することです。自分にも他にも拘らないのが道です。これが悟りの世界ですから。

参禅者U・・　やっぱりそうですか。拘りや執着から超越してる訳ですから当然ですよね。

老　師・・　そうそう。自己を超越した確かな自覚がある。真理とはそれ程明らかで大きいから、皆たまげるのです。この消息の自覚症状を悟りと言うのです。自他が有りながら、二元的関係でありながら、隔てが無いが故に本来一如のことです。縁に依ってたまたまそれぞれに今現成している、この真の姿のことです。因縁所生の法です。その他に何も無いのです。なのに何かその本になる物が有りそうに思っているのが迷いです。妄念であり苦しみの種です。迷いの本はとにかく身心の隔てです。

身心一如に還れば、自他のまま一如ということが分かり、迷えなくなるのです。本一つ物の分かれですから、本来の因縁所生の法即空を体得すれば一切が明瞭するのです。だから見性することに意味があるのです。自分よがりに拘り執着する心の癖が煩悩です。隔てです。これが無くなるまで坐り切ることです。

この世は相対的です。物に従い流れに従って自己が無ければその物自体です。不生不滅と言うことです。一切に拘らないと言うことです。拘らない力を無我と言うのです。今の本当の世界のことです。

とにかく坐禅で死に切っての話しです。坐禅で坐禅を忘れることを、坐上に死ぬと言うのです。坐禅で死に切れば、時々死んでいるのです。これを死中に生有りというのです。本当に死ぬ時、本当に活きているのです。本当に見る時、見るという者も無いのです。この時、自己は死んでいるのです。自己が無いのです。これが本当に活きている時です。生死を越えた大自己、宇宙大の自己です。ただ隔てが有るか無いかの違いです。人情がなかったら仏法は無いのです。是れが大自然の法に拠って起こるか、自我から起こるかです。仏と成るか凡夫となるかです。問題は隔ての有無です。「只」出来るか否かです。努力であり菩提道心の有無に拠るのです。

参禅者U・・　有難うございました。

世話人・・　時間が参りましたので、これで終わりと致します。ご馳走様でした。

平成十六年十二月十一日